

『源氏物語論—人物と叙法—』

本書は、武原弘氏が、自己の十余年にわたる「源氏物語」研究の成果の中から、十四の論考をとりあげて、体系的にまとめられたものである。

本書の構成は、次のようになっている。

第一部 物語世界と人物

第一章 光源氏像と物語世界の基本構造

第二章 対読者意識と物語の世界

第三章 頭中将とその物語世界

第四章 女三宮とその物語世界

第五章 柏木とその物語世界

第六章 大君とその物語世界

第七章 浮舟とその物語世界(一)

第八章 浮舟とその物語世界(二)

第二部 物語の叙法

第二章 場面描写と心理描写

第三章 長篇構想と場面化叙法

第四章 和歌の会話性と文芸性

第五章 抒情的叙法とその効果

第六章 敬語の特殊相と物語叙法

第七章 教材論から見た源氏物語

——文体論の視点からの試み——

本書は、氏の「長篇構想が具体化され、物語として形象化を示し得るのは、作中の各人物像を通してであり、各巻を構成する物語の場面群においてであり、ひいては、それらを

支える描写及び文体にほかならない。」(一六六ペ・傍点は引用者)という基本的な考えのもとに、「源氏物語」研究の柱として「人物」と「叙法」の二つをとりあげ、この二つの研究を総合・統一することを通して、「源氏物語」の特質を究明しようとしている。内容と表現の両面から「源氏物語」に迫ろうとするスケールの大きい研究である。

第一部は、作中人物論で、六人の人物をとあげている。氏の「作中人物論は、単にその人物の性格や容貌等についての把握にとどまるものではなく、「それは人物関係論であり、人物中心の物語世界論とも規定されるもの」である。したがって、「その人物の生きる世界が物語という文芸様式の中で統一的に形象化されることにたえず注目」することによって、「作中人物とその物語世界の全体像の把握に努め」(いずれも七ペ)そのものである。たとえば、第四宮「女三宮をとあげて語世界」においては、女三宮をとりあげても、女三宮降嫁事件と柏木事件とを結び女三宮物語の世界を統一的構造的に把握し、その本質を究明しようとしている。

第二部は、「源氏物語の(文章)表現に即

して、この物語のすぐれた(文学)形象を支えている描写方法あるいは表現技法とその効果」(一四七ペ)を創作主体の側に重心を置いて考察したものである。氏は、まず各巻を構成する物語の場面群に着目し、「場面描写」がどのように工夫されているかを追求している。たとえば、第二章では、「予言描写」をとりあげて、物語の長篇的契機と場面的契機とがどのように効果的に融合統一化されて描かれているかを、第一章では、「垣間見」の「場面描写」において、見られる人物の「心理描写」がどのように有効に描かれているかを、第五章では、敬語の加除が「場面描写」の効果を高めるためにどのように工夫されているかを、それぞれ追求している。ほかに、源氏物語の抒情性の問題を「和歌」や「須磨」の巻をとりあげて論じている。

本書は、「人物」と「叙法」の両面から「源氏物語」に迫ろうとする意欲的な論考集である。先学の説も数多く引用されており、それをふまえて氏の論が展開されているので、私など初学の者にとっても、「源氏物語」研究の方向が示唆される好著である。(昭和五十一年九月二十日、桜楓社刊、A五判、二七〇ページ、四八〇〇円)(世羅博昭)